

## 化粧規範に関する研究

— 社会的場面と化粧基準の評定に基づく化粧規範意識の構造化 —

(2013年8月19日受付；2013年12月2日受理)

平 松 隆 円

チュラロンコーン大学 専任講師

### Study on Makeup Norm Structuring of the Awareness of Makeup Norms Based on Rating of Socially Makeup Situations and Makeup Standards

Ryuen HIRAMATSU, PhD.

*Lecturer (Full-Time), Chulalongkorn University, Thailand*

#### Abstract

The purpose of this study was to clarify the structure of human awareness of makeup norms about how people should decide what to make up in different situations. For this study, 190 male university students (M=20.08 years old, SD=1.69), 342 female university students (M=19.33 years old, SD=1.27), 47 male adults (M=49.30 years old, SD=4.99), and 158 female adults (M=47.44 years old, SD=4.33) were investigated. The main contents of this investigation were to examine the degree of necessity for 120 make up that were consisted of 10 socially makeup situations and 12 makeup standards. The result of factor analysis showed that the awareness of makeup norms consists of 5 basic factors. In addition, the result of cluster analysis showed that there are 3 characteristic clusters.

(Received August 19, 2013; Accepted December 2, 2013)

**Key words:** *awareness of makeup norm, makeup standard, socially makeup situation*

(Journal of the Japan Research Association for Textile End-Uses, Vol.55, pp.140-147, 2014)

#### 要 旨

本研究の目的は、人々が様々な社会的場面でおこなう化粧が、どのような点を重視して決められているのかという化粧規範意識について、その構造をあきらかにすることである。調査対象者は、学生男子 190 人(平均年齢=20.08 歳, SD=1.69), 学生女子 342 人(平均年齢=19.33 歳, SD=1.27), 親世代男子 47 人(平均年齢=49.30 歳, SD=4.99), 親世代女子 158 人(平均年齢=47.44 歳, SD=4.33) である。10 項目の社会的場面と 12 項目の化粧基準を選定し、それらを組み合わせた 120 項目の化粧行動に対して、その必要度から化粧規範意識を調査した。因子分析の結果、化粧規範意識は 5 つの因子から構成されることがあきらかとなった。また構造化された化粧規範意識にもとづき調査対象者を類型化した結果、3 つのクラスターの存在もあきらかとなった。

キーワード：化粧規範意識, 化粧基準, 化粧を施す社会場面

## 1. はじめに

私たちは、日常生活における様々な場面において、意識的にもしくは無意識的に一定の化粧をおこなっている。それは、人が生きていくなかで、その社会の成員としてふさわしい生活様式、価値、制度を身につけているからである。つまり、社会的な場面での化粧を規定する、行動や判断の基準としての化粧規範が、人々のあいだで存在していることを意味している。

これまで化粧規範について、いくつか検討されてきた。

平松・牛田<sup>1)</sup>は「化粧を施す生活場面とそれを規定する化粧意識と個人差要因」について検討し、対人接触や状況の公私の高さにより化粧を施す生活場面が構造化され、男性では必需品・身だしなみの化粧意識が、女性では魅力向上・気分高揚、必需品・身だしなみ、効果不安の化粧意識が化粧を施す生活場面を規定していることをあきらかにした。

平松<sup>2)</sup>は「公衆場面での化粧行動への社会的是非と個人差要因」について検討し、公衆場面での化粧行動や社会的是非は、特定・不特定の他者の存在や状況の公私によって構造化されていること、不特定他者がいる比較的公的な場面で社会的にも化粧をしてよいと考えている者は、特定・不特定の他者の存在に関係なく化粧行動をおこなっていることをあきらかにした。

平松<sup>3)</sup>は「社会的場面で施す化粧程度の構造と個人差要因との関連性」について検討し、自己の化粧程度と世間一般の化粧程度は共通して公的場面と私的場面に、化粧基準は個性、社会的調和、他者同調に構造化され、男女共通して自己の化粧程度の公的場面に世間一般の化粧程度としての公的場面が、自己の化粧程度の私的場面に世間一般の化粧程度としての私的場面が規定することをあきらかにした。また、男性では自己の化粧程度の公的場面と私的場面に化粧基準の個性が、女性では自己の化粧程度の公的場面と私的場面に化粧基準の個性、社会的調和、他者同調が規定していること、男性では公的自意識の高さが、女性では外的他者意識の高さが自己の化粧程度を規定していることをあきらかにした。

しかしながら先行研究では、いまだじゅうぶんに化粧行動を規定する行動や判断の基準としての化粧規範が検討されているとは言いがたい。そこで本研究では、社会的場面と化粧基準を組み合わせることで化粧規範意識の構造をあきらかにする

ことを目的とした。また、その構造が男女によって、また 20 歳前後の若者とその親世代によってどのように異なるのかを比較検討することを目的とした。

## 2. 調査の概要

### 2-1 調査方法、調査時期、調査対象者

関西にある大学に通学する学生およびその両親を中心とする社会人を対象に、質問紙調査をおこなった。倫理的配慮として調査票に研究の目的、回答は任意であり、無記名で個人が特定されないことを明記した。

調査対象者は、学生男子 190 人（平均年齢=20.08 歳、SD=1.69）、学生女子 342 人（平均年齢=19.33 歳、SD=1.27）、親世代男子 47 人（平均年齢=49.30 歳、SD=4.99）、親世代女子 158 人（平均年齢=47.44 歳、SD=4.33）であった。

### 2-2 調査内容

#### 1) 社会的場面の重要度

平松<sup>2)</sup><sup>3)</sup>の先行研究をもとに、世代や性別を通じて経験度が高く、また一般的と考えられる 10 項目の社会的場面を選定した。

10 項目の社会的場面とは「同窓会に出席する」「学校で授業を受ける」「友人（同性 / 異性）と外出する」「小さな子ども（幼稚園児）と接する」「結婚式に出席する」「近所のスーパー / コンビニで買い物をする」「病院へお見舞いに行く」「家族と外出する」「デパートで買い物をする」「仕事（アルバイト）に行く」である。

調査対象者自身が、それぞれの場面をどの程度重視するかについて、「重要ではない(1)」から「重要である(5)」までの 5 件法で回答を求めた。

#### 2) 化粧規範意識

平松<sup>3)</sup>の先行研究をもとに、12 項目の化粧基準を選定し、10 項目の社会的場面と組み合わせ、例えば『同窓会に出席する』ときには『自分を引き立てる、化粧をする』というような 120 項目の化粧規範意識項目を設定した。

12 項目の化粧基準は「自分を引き立てる化粧をする」「周囲の人から信用を損なわない化粧をする」「伝統やしきたりにあっている化粧をする」「自分の好みにあっている化粧をする」「自分の社会的地位や立場にふさわしい化粧をする」「周囲の人と同じ化粧をする」「自分らしさが表現できる化粧をする」「周囲の人に失礼にならない化粧をする」「目新しく人目をひく化粧をする」「自分の魅力がアップできる化粧をする」「自分の性や

Table 1 社会的場面の重要度の平均値と標準偏差 (ANOVA・Scheffe)

	学生男子		学生女子		親世代男子		親世代女子		F値	有意水準
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
同窓会に出席する	3.62	1.28	3.65	1.24	3.00	1.33	3.33	1.24	5.17	**
学校で授業を受ける	3.97	1.08	4.27	1.03	3.76	1.17	4.02	1.19	5.21	**
友人(同性 / 異性)と外出する	4.32	0.91	4.29	0.91	3.80	0.94	3.97	0.93	7.88	***
小さな子ども(幼稚園児)と接する	3.53	1.14	3.58	1.16	3.76	1.06	3.38	1.20	1.85	
結婚式に出席する	4.00	1.07	4.07	0.98	3.98	0.93	4.17	1.00	0.65	
近所のスーパー / コンビニで買い物をする	3.41	1.20	3.51	1.23	3.38	1.25	3.62	1.30	0.74	
病院へお見舞いに行く	3.92	0.96	4.13	0.91	4.22	0.81	4.12	0.97	2.68	
家族と外出する	3.52	1.15	4.11	0.98	4.33	0.76	4.10	0.96	17.94	***
デパートで買い物をする	3.29	1.18	3.77	1.10	2.96	1.21	3.36	1.09	13.19	***
仕事(アルバイト)に行く	4.14	0.98	4.30	1.02	4.38	1.01	4.44	0.86	2.80	

\*\* $P < .01$  \*\*\* $P < .001$ 

年齢にあっている化粧をする」「若々しくみえる化粧をする」であり、10項目の社会的場面とは社会的場面の重要度と同一の項目である。

それぞれの項目について、調査対象者自身がその場面でどのように化粧をすることを心がけることが、どの程度必要と思うかを、「必要ではない(1)」から「必要である(5)」までの5件法で回答を求めた。

### 3) フェイス項目

年齢と性別を回答させた。

## 3. 結果

### 3-1 社会的場面の重要度の基礎統計量

社会的場面の重要度の各項目の評定平均値をみてみたい (Table 1)。

学生男子では「友人(同性 / 異性)と外出する」を最も重視しており、次いで「仕事(アルバイト)に行く」「結婚式に出席する」を重視していた。学生女子では「仕事(アルバイト)に行く」を最も重視しており、次いで「友人(同性 / 異性)と外出する」「学校で授業を受ける」を重視していた。親世代男子では「仕事(アルバイト)に行く」を最も重視しており、次いで「家族と外出する」「病院へお見舞いに行く」を重視していた。親世代女子では「仕事(アルバイト)に行く」を最も重視しており、次いで「結婚式に出席する」「病院へお見舞いに行く」を重視していた。

男女と世代による差を検討するため、Scheffeによる多重比較をおこなった。その結果 (Table 1)、「同窓会に出席する」(親世代男子<学生男子・学生女子:  $F(3.713) = 5.17, p < 0.01$ )、「学校で授業を受ける」(学生男子・親世代男子<学生女子:  $F(3.713) = 5.21, p < 0.01$ )、「友人(同性 / 異性)と外出する」(親世代男子・親世代女子<学生男子・学生女子:  $F(3.713) = 7.88, p < 0.001$ )、「家族と外出する」(学生男子<学生女子・親世代

Table 2 社会的場面の重要度の構造 (主成分分析・Varimax)

	私的場面	公的場面
家族と外出する	<b>0.72</b>	0.18
学校で授業を受ける	<b>0.71</b>	0.07
近所のスーパー / コンビニで買い物をする	<b>0.71</b>	0.00
仕事(アルバイト)に行く	<b>0.67</b>	0.03
病院へお見舞いに行く	<b>0.61</b>	0.33
小さな子ども(幼稚園児)と接する	<b>0.57</b>	0.29
同窓会に出席する	-0.06	<b>0.78</b>
結婚式に出席する	0.04	<b>0.76</b>
友人(同性 / 異性)と外出する	0.34	<b>0.59</b>
デパートで買い物をする	0.24	<b>0.50</b>
固有値	3.39	1.45
累積寄与率	28.36	48.47
$\alpha$	0.77	0.62

男子・親世代女子:  $F(3.713) = 17.94, p < 0.001$ )、「デパートで買い物をする」(学生男子・親世代男子・親世代女子<学生女子:  $F(3.713) = 13.19, p < 0.001$ ) で有意な主効果が認められた。

### 3-2 社会的場面の重要度の構造

社会的場面の重要度の構造をあきらかにするため、評定平均値をもとに主成分分析 (Varimax 回転) をおこなった。なお、因子の選定は、Kaiser-Guttman による最低固有値 1.0 を基準とした。

その結果 (Table 2)、第1因子は、「家族と外出する」「学校で授業を受ける」「近所のスーパー / コンビニで買い物をする」などの項目が高く寄与したため、『私的場面』( $\alpha = 0.77$ ) と命名した。第2因子は、「同窓会に出席する」「結婚式に出席する」「友人(同性 / 異性)と外出する」などの項目が高く寄与したため、『公的場面』( $\alpha = 0.62$ ) と命名した。

これらの因子は、性別や世代別に主成分分析をおこなった結果においても、一部の因子の順序が入れ替わるものの、2つの因子で解釈が可能であった。そこで、この2因子で簡便因子得点 (各因

Table 3 社会的場面の重要度因子の平均値と標準偏差 (ANOVA・Scheffe)

	学生男子		学生女子		親世代男子		親世代女子		F値	有意水準
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
私的場面	3.75	0.73	3.99	0.73	4.01	0.56	3.94	0.78	4.55	**
公的場面	3.81	0.76	3.94	0.75	3.44	0.66	3.70	0.74	7.90	***

\*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$ 

子をより明確にするため、因子ごとに高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する方法)を算出し、以後の分析データとした。

### 3-3 社会的場面の重要度の男女差・世代差

社会的場面の重要度の各因子の男女と世代による差を検討するため、Scheffeによる多重比較をおこなった。

その結果 (Table 3), 『私的場面』(学生男子<学生女子:  $F(3.713) = 4.55, p < 0.01$ ), 『公的場面』(親世代男子<学生男子, 親世代男子・親世代女子<学生女子:  $F(3.713) = 7.90, p < 0.001$ )で有意な主効果が認められた。

### 3-4 化粧規範意識の構造

120項目の化粧規範意識の構造をあきらかにするため、評定平均値をもとに主成分分析(Varimax回転)をおこなった。なお、因子の選定は、Kaiser-Guttmanによる最低固有値 1.0を基準とした。

その結果 (Table 4), 第1因子は、「結婚式に出席する×周囲の人から信用を損なわない化粧をする」「結婚式に出席する×周囲の人に失礼にならない化粧をする」「仕事(アルバイト)に行く×周囲の人から信用を損なわない化粧をする」などの項目が高く寄与したため、『調和』( $\alpha = 0.97$ )と命名した。第2因子は、「結婚式に出席する×自分らしさが表現できる化粧をする」「仕事(アルバイト)に行く×自分の好みにあっている化粧をする」「病院へお見舞いに行く×自分の好みにあっている化粧をする」などの項目が高く寄与したため、『個性』( $\alpha = 0.96$ )と命名した。第3因子は、「デパートで買い物をする×周囲の人と同じ化粧をする」「友人と外出する×周囲の人と同じ化粧をする」「家族と外出する×周囲の人と同じ化粧をする」などの項目が高く寄与したため、『同調』( $\alpha = 0.92$ )と命名した。第4因子は、「近所のスーパーやコンビニで買い物をする×自分の魅力がアップできる化粧をする」「近所のスーパーやコンビニで買い物をする×自分らしさが表現できる化粧をする」「近所のスーパーやコンビニで買い物をする×自分の性や年齢にあっている化粧をする」などの項目が高く寄与したため、『近接』

( $\alpha = 0.92$ )と命名した。第5因子は、「家族と外出する×若々しくみえる化粧をする」「友人と外出する×若々しくみえる化粧をする」「デパートで買い物をする×若々しくみえる化粧をする」などの項目が高く寄与したため、『若さ』( $\alpha = 0.92$ )と命名した。

これらの因子は、性別や世代別に主成分分析をおこなった結果においても、一部の因子の順序が入れ替わるものの、5つの因子で解釈が可能であった。そこで、この5因子で簡便因子得点(各因子をより明確にするため、因子ごとに高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する方法)を算出し、以後の分析データとした。

### 3-5 化粧規範意識の男女差・世代差

化粧規範意識の各因子の男女と世代による差を検討するため、Scheffeによる多重比較をおこなった。

その結果 (Table 5), 『調和』(学生男子<学生女子・親世代女子, 親世代男子<学生女子・親世代女子:  $F(3.575) = 30.09, p < 0.001$ ), 『個性』(学生男子<学生女子・親世代女子, 親世代男子<学生女子・親世代女子, 親世代女子<学生女子:  $F(3.575) = 25.80, p < 0.001$ ), 『近接』(学生男子<学生女子・親世代女子, 学生女子・親世代男子<親世代女子:  $F(3.575) = 5.38, p < 0.01$ ), 『若さ』(学生男子<学生女子・親世代女子, 学生女子・親世代男子<親世代女子:  $F(3.575) = 13.68, p < 0.001$ )で有意な主効果が認められた。

### 3-6 化粧規範意識の類型化

構造化された化粧規範意識について、各因子における簡便因子得点を用いてWard法によるクラスター分析をおこなった。分析の結果 (Figure 1), 樹形図から3クラスター構成が最も適当だと判断された。

クラスター間の特徴を調べるために、化粧規範意識の因子別に、Scheffeによる多重比較をおこなった。

その結果 (Table 6), 『調和』(クラスター1<クラスター2・クラスター3, クラスター2<クラスター3:  $F(3.613) = 293.70, p < 0.001$ ), 『個性』(クラスター1<クラスター2・クラスター3, ク

Table 4 化粧規範意識の構造 (主成分分析・Varimax)

	調和	個性	同調	近接	若さ
結婚式に出席する×周囲の人から信用を損なわない化粧をする	<b>0.81</b>	0.21	0.16	-0.08	0.06
結婚式に出席する×周囲の人に失礼にならない化粧をする	<b>0.78</b>	0.17	0.09	-0.06	0.10
仕事(アルバイト)に行く×周囲の人から信用を損なわない化粧をする	<b>0.76</b>	0.24	0.02	0.04	0.09
仕事(アルバイト)に行く×周囲の人に失礼にならない化粧をする	<b>0.76</b>	0.22	0.05	0.08	0.07
結婚式に出席する×自分の社会的地位や立場にふさわしい化粧をする	<b>0.75</b>	0.20	0.18	-0.08	0.09
病院へお見舞いに行く×周囲の人から信用を損なわない化粧をする	<b>0.75</b>	0.21	0.02	0.19	-0.06
病院へお見舞いに行く×周囲の人に失礼にならない化粧をする	<b>0.72</b>	0.20	-0.05	0.22	-0.08
仕事(アルバイト)に行く×自分の社会的地位や立場にふさわしい化粧をする	<b>0.71</b>	0.25	0.09	0.04	0.10
小さな子どもと接する×周囲の人に失礼にならない化粧をする	<b>0.69</b>	0.17	-0.01	0.23	-0.05
同窓会に出席する×周囲の人に失礼にならない化粧をする	<b>0.68</b>	0.13	0.20	0.03	0.17
結婚式に出席する×自分の性や年齢にあっている化粧をする	<b>0.67</b>	0.30	0.07	-0.06	0.25
友人と外出する×周囲の人から信用を損なわない化粧をする	<b>0.67</b>	0.19	0.30	0.01	0.11
友人と外出する×周囲の人に失礼にならない化粧をする	<b>0.67</b>	0.16	0.28	-0.04	0.14
小さな子どもと接する×周囲の人から信用を損なわない化粧をする	<b>0.66</b>	0.20	-0.02	0.20	-0.07
病院へお見舞いに行く×自分の社会的地位や立場にふさわしい化粧をする	<b>0.66</b>	0.18	0.14	0.30	-0.05
同窓会に出席する×自分の性や年齢にあっている化粧をする	<b>0.66</b>	0.25	0.04	-0.03	0.33
家族と外出する×周囲の人に失礼にならない化粧をする	<b>0.66</b>	0.06	0.15	0.22	0.17
デパートで買い物をする×周囲の人に失礼にならない化粧をする	<b>0.66</b>	0.10	0.22	0.10	0.14
デパートで買い物をする×周囲の人から信用を損なわない化粧をする	<b>0.65</b>	0.12	0.27	0.13	0.10
学校で授業を受ける×周囲の人に失礼にならない化粧をする	<b>0.64</b>	0.10	0.07	0.18	0.15
友人と外出する×自分の性や年齢にあっている化粧をする	<b>0.63</b>	0.28	0.09	0.01	0.32
家族と外出する×周囲の人から信用を損なわない化粧をする	<b>0.63</b>	0.14	0.14	0.28	0.14
同窓会に出席する×周囲の人から信用を損なわない化粧をする	<b>0.62</b>	0.16	0.26	-0.01	0.13
小さな子どもと接する×自分の社会的地位や立場にふさわしい化粧をする	<b>0.62</b>	0.18	0.04	0.21	-0.06
結婚式に出席する×自分らしさが表現できる化粧をする	<b>0.36</b>	<b>0.66</b>	0.11	-0.07	0.13
仕事(アルバイト)に行く×自分の好みにあっている化粧をする	<b>0.25</b>	<b>0.64</b>	0.12	0.08	0.10
病院へお見舞いに行く×自分の好みにあっている化粧をする	<b>0.19</b>	<b>0.64</b>	0.04	0.34	-0.02
結婚式に出席する×自分の魅力がアップできる化粧をする	<b>0.37</b>	<b>0.64</b>	0.12	-0.04	0.14
病院へお見舞いに行く×自分らしさが表現できる化粧をする	<b>0.09</b>	<b>0.64</b>	0.12	0.38	0.01
結婚式に出席する×自分の好みにあっている化粧をする	<b>0.40</b>	<b>0.63</b>	0.09	-0.09	0.12
小さな子どもと接する×自分らしさが表現できる化粧をする	<b>0.23</b>	<b>0.62</b>	-0.04	0.25	0.01
病院へお見舞いに行く×自分の魅力がアップできる化粧をする	<b>0.03</b>	<b>0.62</b>	0.23	0.38	-0.04
友人と外出する×周囲の人と同じ化粧をする	0.07	0.09	<b>0.77</b>	-0.08	0.07
家族と外出する×周囲の人と同じ化粧をする	0.00	0.10	<b>0.71</b>	0.18	0.11
結婚式に出席する×周囲の人と同じ化粧をする	0.19	0.08	<b>0.70</b>	-0.09	0.03
同窓会に出席する×周囲の人と同じ化粧をする	0.10	-0.01	<b>0.67</b>	0.01	0.09
学校で授業を受ける×周囲の人と同じ化粧をする	0.16	0.03	<b>0.66</b>	0.08	0.04
仕事(アルバイト)に行く×周囲の人と同じ化粧をする	0.25	0.10	<b>0.63</b>	0.00	0.05
病院へお見舞いに行く×周囲の人と同じ化粧をする	0.17	0.14	<b>0.62</b>	0.24	-0.05
近所のスーパーやコンビニで買い物をする×自分の魅力がアップできる化粧をする	0.05	0.41	0.07	<b>0.70</b>	0.08
近所のスーパーやコンビニで買い物をする×自分らしさが表現できる化粧をする	0.12	0.41	-0.01	<b>0.68</b>	0.06
近所のスーパーやコンビニで買い物をする×自分の性や年齢にあっている化粧をする	0.36	0.10	0.02	<b>0.66</b>	0.20
近所のスーパーやコンビニで買い物をする×自分の社会的地位や立場にふさわしい化粧をする	0.29	-0.06	0.28	<b>0.65</b>	0.13
家族と外出する×若々しく見える化粧をする	0.26	0.17	0.17	0.27	<b>0.71</b>
友人と外出する×若々しく見える化粧をする	0.34	0.22	0.23	0.04	<b>0.71</b>
デパートで買い物をする×若々しく見える化粧をする	0.28	0.18	0.19	0.11	<b>0.70</b>
学校で授業を受ける×若々しく見える化粧をする	0.18	0.26	0.22	0.15	<b>0.67</b>
結婚式に出席する×若々しく見える化粧をする	0.29	0.28	0.26	-0.02	<b>0.66</b>
同窓会に出席する×若々しく見える化粧をする	0.35	0.24	0.21	0.05	<b>0.64</b>
仕事(アルバイト)に行く×若々しく見える化粧をする	0.20	0.28	0.26	0.10	<b>0.63</b>
固有値	39.95	9.32	6.85	5.36	3.36
累積寄与率	19.18	32.96	42.03	48.44	54.02
n	0.97	0.96	0.92	0.92	0.92

因子負荷量0.60以上のみ記載

Table 5 化粧規範意識因子の平均値と標準偏差 (ANOVA・Scheffe)

	学生男子		学生女子		親世代男子		親世代女子		F値	有意水準
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
調和	3.27	1.09	3.89	0.59	3.23	1.17	3.88	0.48	30.09	***
個性	2.99	0.99	3.57	0.64	2.81	1.03	3.29	0.59	25.80	***
同調	2.42	0.82	2.53	0.76	2.34	0.91	2.44	0.69	2.19	
近接	2.33	1.01	2.53	0.91	2.42	1.01	2.79	0.90	5.38	**
若さ	2.82	1.07	3.04	1.01	2.74	1.05	3.52	0.82	13.68	***

\*\* $P < .01$  \*\*\* $p < .001$ 

Table 6 化粧規範意識のクラスター分析 (ANOVA・Scheffe)

	クラスター1		クラスター2		クラスター3		F値	有意水準
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
調和	2.25	1.04	3.78	0.54	4.33	0.36	293.70	***
個性	1.84	0.70	3.45	0.52	4.09	0.39	439.45	***
同調	1.47	0.48	2.54	0.63	3.04	0.84	139.97	***
近接	1.25	0.39	2.49	0.76	3.62	0.57	265.06	***
若さ	1.51	0.56	3.07	0.78	4.32	0.47	349.74	***

\*\*\* $p < .001$ 

クラスター2<クラスター3 :  $F(3.613) = 439.45$ ,  $p < 0.001$ ), 『同調』(クラスター1<クラスター2・クラスター3, クラスター2<クラスター3 :  $F(3.613) = 139.97$ ,  $p < 0.001$ ), 『近接』(クラスター1<クラスター2・クラスター3, クラスター2<クラスター3 :  $F(3.613) = 265.06$ ,  $p < 0.001$ ), 『若さ』(クラスター1<クラスター2・クラスター3, クラスター2<クラスター3 :  $F(3.613) = 349.74$ ,  $p < 0.001$ ) で有意な主効果が認められた。

次に, それぞれのクラスターに所属する属性の構成比率を求め, 各クラスターにおける化粧規範意識の構造とそれらを構成する男女・世代から, グループの特徴づけを試みた。

その結果 (Table 7), クラスター1 では学生男子や親世代男子が多く, 反対にクラスター2 やクラスター3 では学生女子や親世代女子が多かった。また, クラスター1 やクラスター3 が学生よりも親世代が多く, クラスター2 は学生が多かった。

#### 4. 考察

##### 4-1 社会的場面の重要度

社会的場面の重要度の各項目の評定平均値から, 性別や世代に関係なく, ほとんどの場面を重要な場面ととらえていることがあきらかとなった。

とくに, 大学生では男女を問わず「友人(同性/異性)と外出する」「仕事(アルバイト)に行く」を重視していることがわかった。また, 親世代では男女とも「仕事(アルバイト)に行く」を, 親世代男子では「家族と外出する」を, 親世代女子では「結婚式に出席する」を重視していることが

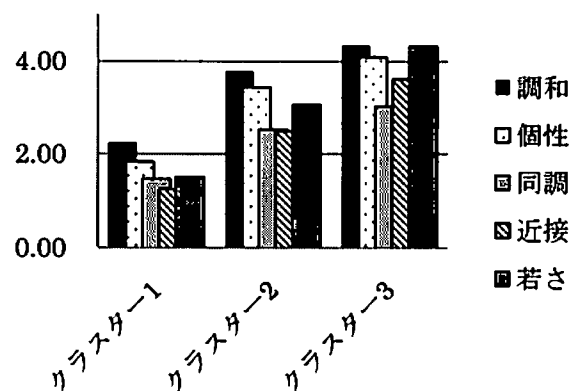


Figure 1 化粧規範意識のクラスター分析

Table 7 化粧規範意識のクラスター構成の割合

	クラスター1	クラスター2	クラスター3
学生男子	24.20	68.00	7.80
学生女子	9.20	73.40	17.40
親世代男子	28.60	60.00	11.40
親世代女子	6.40	74.30	19.30

あきらかとなった。

このことにより, 性別や世代に関係なく, 仕事(アルバイト)という多様な人間関係が存在する社会とのつながりが, 重要度と関係していると推測される。しかしながら, 学生男子・学生女子・親世代男子では, 「友人(同性/異性)と外出する」「家族と外出する」という特定の人間関係を前提としたつながりも, 重要ととらえている。今回, 親世代の有職もしくは無職については, 調査をおこなっていない。そのため, 日常的にどのような

生活を過ごしているかが、重要度の回答に影響を与えた可能性がある」と推測される。

社会的場面の重要度の構造を検討した結果、『私的場面』と『公的場面』に構造化されることがあきらかとなった。

福岡ら<sup>4)</sup>や阿部ら<sup>5)</sup>といった、化粧と関係する衣服の着装規範に関する研究では、社会的場面の重要度はフォーマル、セミフォーマル、インフォーマルに構造化されることがあきらかとなっている。しかしながら、本研究では場面の公私により構造化された。これは、社会的場面で施す化粧程度の構造を検討した平松<sup>3)</sup>の公的場面や私的場面、公衆場面での化粧行動の構造を検討した平松<sup>6)</sup>の特定他者場面や不特定他者場面と同様の結果である。

構造化された社会的場面の男女差・世代差を検討したところ、『私的場面』では学生男子に比べ学生女子の重要度が高く、『公的場面』では親世代男子に比べ学生男子の、親世代男子や親世代女子に比べ学生女子の重要度が高いことがあきらかとなった。

#### 4-2 化粧規範意識

社会的場面と化粧基準を組み合わせた化粧規範意識について主成分分析をおこなったところ、『調和』『個性』『同調』『近接』『若さ』の5因子があきらかとなった。

阿部ら<sup>5)</sup>や辻ら<sup>7)</sup>の着装規範意識に関する研究では、『フォーマル場面での個性・流行、インフォーマル場面での社会的調和重視』『フォーマル場面での実用性重視』『セミフォーマル、インフォーマル場面での実用性重視』『フォーマル、セミフォーマル場面での社会的調和重視』があきらかとなっているように、フォーマル、セミフォーマル、インフォーマルという社会的場面のフォーマリティの程度の違いと、個性流行、実用性、社会的調和という着装基準の組み合わせにより構成されている。しかしながら、化粧規範意識については、『近接』が「近所のスーパーやコンビニで買い物をする」のみの社会的場面で構造化されたのに対して、その他の因子には特定の場面の傾向は認められなかった。

その一方で、『近接』がほとんどの化粧基準を含むものの、他の因子では特定の化粧基準で収束されている。すなわち、化粧規範意識は場面にかかわらず、化粧基準によって構造化されていることがあきらかとなった。その理由として、化粧は塗抹の程度差はあれ、一般的には衣服のように大き

く印象をかえるデザインや色彩的变化を日常のなかでおこなうことは珍しい。そのため、場面というTPOよりも、どのような目的で化粧をおこなうかという化粧基準の影響が大きいと推測される。

しかしながら、『近接』が「近所のスーパーやコンビニで買い物をする」のみの社会的場面で構造化されたのは、近所という限定的で狭小的な空間が、影響していると推測される。すなわち、近所であるがゆえに、すでに自分自身が周囲からよく知られており、他の場面に比べ、特定の印象管理を必要としないからだと推測される。

構造化された化粧規範意識の男女差・世代差を検討したところ、『調和』では、学生男子に比べ学生女子・親世代女子の、親世代男子に比べ学生女子・親世代女子の意識が高いことがあきらかとなった。『個性』では、学生男子に比べ学生女子・親世代女子の、親世代男子に比べ学生女子・親世代女子の意識が高いことがあきらかとなった。『近接』では、学生男子に比べ学生女子・親世代女子の、学生女子・親世代男子に比べ親世代女子の意識が高いことがあきらかとなった。『若さ』では、学生男子に比べ学生女子・親世代女子の、学生女子・親世代男子にくらべ親世代女子の意識が高いことがあきらかとなった。『同調』では男女差・世代差が認められなかった。すなわち、おおむね世代に関係なく男性に比べ女性の意識が高いことがわかった。とくに、『個性』は親世代女子に比べ学生女子の意識が高かった。

笹山・永松<sup>8)</sup>は、年齢が若い女性ほど化粧をアクセサリのようなものととらえ、美しくみせたいことをあきらかにしている。親世代女子に比べ学生女子の『個性』の意識が高い本研究結果は、笹山・永松の研究を裏付けるものである。反対に、『近接』や『若さ』は学生女子に比べ親世代女子の意識が高かった。これは、「近所のスーパーやコンビニで買い物をする」という近隣の住人にみられるという意識、親世代という平均47.44歳という年齢からのアンチエイジング志向が影響していると推測される。

アンチエイジングとは、予防医学分野における抗老化への取り組みである。しかしながら、日本抗加齢医学会に、見た目のアンチエイジング研究会という分科会があるように、一般的には年を重ねるごとにあらわれる肌の悩み、頭髪のトラブルに対処し、いつまでも若々しくいられるような外

見のアンチエイジングが試みられている。平松<sup>9)</sup>によれば、バブル世代を中心に、市場規模はここ10年で1.5倍に成長している。

#### 4-3 化粧規範意識の類型化

化粧規範意識の簡便因子得点をもとに、クラスター分析によって調査対象者の類型化を試みた結果、3つのクラスターに分類することができた。

各クラスターにグループ分けされた化粧規範意識の簡便因子得点とグループを構成している基本属性からグループの特徴づけをおこなったところ、クラスター1はすべての因子において化粧規範意識が低いことから、化粧に消極的なグループであり、その内訳は学生男子や親世代男子が多いことがわかった。すなわち、世代に関係なく男性は化粧規範意識が低く、化粧に消極的であることが推測される。クラスター2とクラスター3を構成する化粧規範意識因子は、いずれもクラスター2よりもクラスター3が高く、クラスター3の方が化粧に積極的なグループであることがわかった。その内訳はクラスター2とクラスター3に共通して学生男子が少なく、親世代男子も少ない。すなわち、世代に関係なく女性は化粧規範意識が高く、化粧に積極的であることが推測される。また、クラスター1やクラスター3は学生よりも親世代の方が多く、その差はクラスター3の方が大きかった。反対に、クラスター2は親世代よりも学生の方が多かった。すなわち、学生よりも親世代の方が化粧規範意識の高いことが推測される。

規範とは、社会の成員としてふさわしい生活様式、価値、制度を身につけることであり、学習の結果、社会化される。したがって、学生よりも親世代が、規範意識が高くなったと推測される。

#### 5. まとめと今後の課題

本研究では、120の化粧規範意識の項目によって化粧規範を測る尺度を作成し、世代別と男女別で比較検討をおこなった。しかしながら、化粧規範意識の構造は、関連する着装規範意識の構造とは異なり、社会的場面のフォーマリティの関連はほとんどみられなかった。今後の課題として、社

会的場面の選定を含めた尺度の妥当性の吟味が必要である。

さらに、今回は大学生と彼らの親世代を対象として比較検討をおこなったが、今後は児童や高齢者を対象に、規範の形成あるいは発達に関するより詳細な検討が必要である。

#### 参考文献

- 1) 平松隆円・牛田聡子；化粧規範に関する研究—化粧を施す生活場面とそれを規定する化粧意識と個人差要因—, 繊消誌, 48(12): 59-68 (2008)
- 2) 平松隆円；公衆場面での化粧行動への社会的是非と個人差要因の関連性, ファッションビジネス学会誌, 15: 33-42 (2010)
- 3) 平松隆円；社会的場面で施す化粧程度の構造と個人差要因との関連性, ファッションビジネス学会論文誌, 16: 41-52 (2011)
- 4) 福岡欣治・高木修・神山進・牛田聡子・阿部久美子；着装規範に関する研究(第1報)—生活場面と着装基準の関連性—, 繊消誌, 39(11): 42-48 (1998)
- 5) 阿部久美子・高木修・神山進・牛田聡子・辻幸恵；着装規範に関する研究(第3報)—生活場面と着装基準の評定に基づく着装規範意識の構造化—, 繊消誌, 41(11): 10-16 (2000)
- 6) 平松隆円；公衆場面での化粧行動における規範意識と依存性, 佛教大学教育学部学会紀要, 11: 147-155 (2012)
- 7) 辻幸恵・高木修・神山進・阿部久美子・牛田聡子；着装規範に関する研究(第5報)—着装規範の親子間の対応性に及ぼす親子関係の影響—, 繊消誌, 41(11): 25-32 (2000)
- 8) 笹山郁生・永松亜矢；化粧行動を規定する諸要因の関連性の検討, 福岡教育大学紀要(第4分冊・教職科編), 48: 241-251 (1999)
- 9) 平松隆円；美魔女とはなんだったのか?, 日本繊維製品消費科学会 2013 年年次大会・研究発表要旨集: 77 (2013)